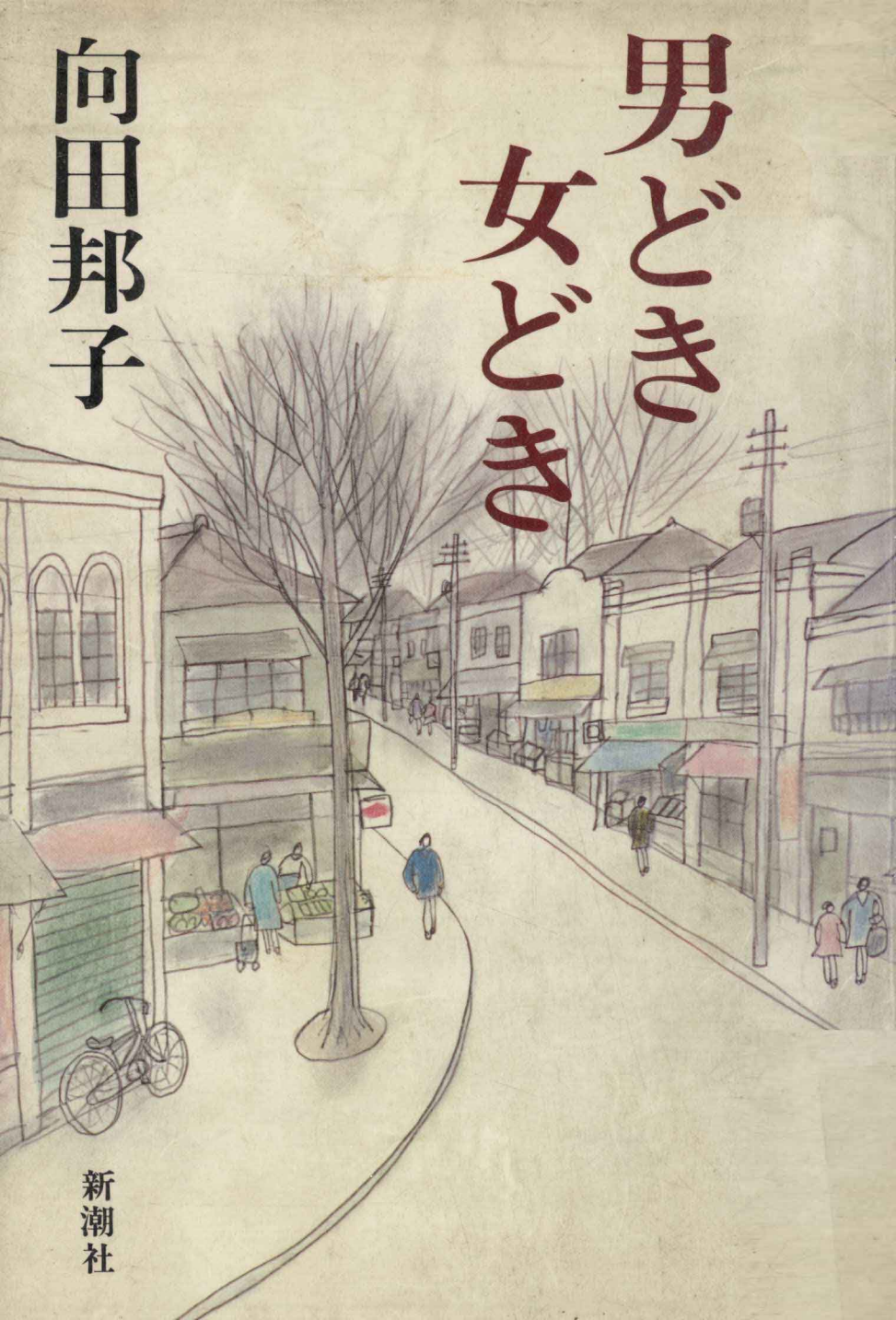
男どき女どき

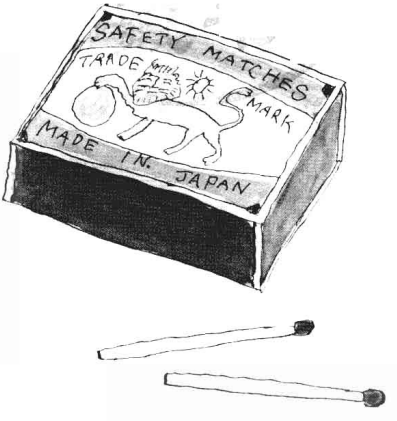
向田邦子



新潮社

男どき女どき

向田邦子



新潮社版

男(お)どき女(め)どき

著　者　向田邦子（むこうだくにこ）

昭和五十七年　七　月　三十　日印刷

昭和五十七年　八　月　五　日発行

発行者　佐藤亮一

印刷所　二光印刷株式会社　製本所　大口製本株式会社

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社　新潮社

電　話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定　価　九〇〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Sei Mukouda, Printed in Japan. 1982

男どき女どき・目次

I
鮒 9
ビリケン 33
三角波 55
嘘つき卵 77
II
再会 101
鉛筆 107
III
若々しい女(ひと)について 123

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

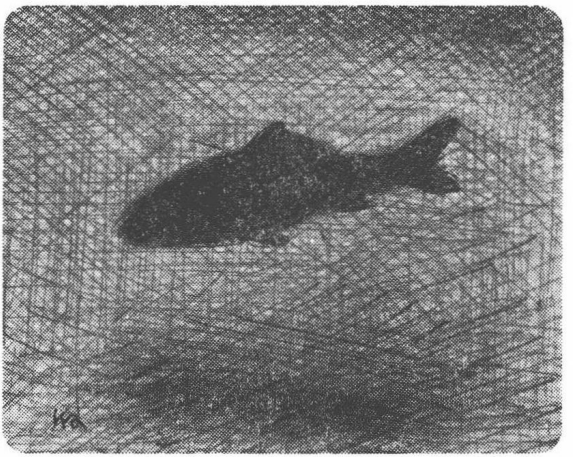
独(ひと)りを慎しむ 128
ゆでたまご 133
草津の犬 136
花束 139
わたしと職業 146
IV
反芻旅行 153
故郷(ふるさと)もどき 157
日本の女 160
アンデルセン 164

サーカス　168
笑いと嗤い　170
伯爵のお気に入り　177
V
花底蛇（かていのじゃ）　181
壊れたと壊したは違う　184
無口な手紙　187
甘くはない友情・愛情　192
黄色い服　195
美醜　200

男どき女どき

時の間にも、男時（おどき）・女時（めどき）とてあるべし（「風姿花伝」）

I



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鮒

「あ、誰か来た」
呟いたのは長女の真弓である。
「いま台所のドアが開いた。間違いなし」
わが娘ながら、塩村は真弓のこういうところが気に入らない。ピアノの教師に音感がいいとおだてられ、さ来年は音楽専門の大学へ入ると言い出してからは、ことあるごとに自分の耳のいいのをひけらかす。一軒おいた隣りの目覚時計の鳴りっぱなしが聞えたの、石焼芋の売り子の声が変ったのと言い、塩村が聞えない判らないと言おうものなら父親を音痴扱いにする。
見下(みくだ)されると依怙地(いこじ)になって、
「誰も来やしないよ。そら耳だろ」

と言いたくなる。その日は珍しく女房の三輪子も塩村の肩をもった。
「誰か来りゃ声がするわよ」
三輪子にしてみれば、たまさかの日曜日である。いつもゴルフだなんだとうちをあける塩村が小雨模様のせいか珍しくうちにいて、十一になる長男の守も加わって家族四人、水入らずで朝昼兼帯の食事が終ったところである。別に何がおかしいわけでもなかったが、笑い声もまじって話がはずんでいた。せっかく興(きょう)にのったはなしを中断して台所を覗くのは勿体なかったのかも知れない。
「真弓、お前耳が悪いんじゃないのか」
「耳が悪いのはパパでしょ。笑う声だってひとりだけ音程外れてるんだから」
「笑い声に音程があるかい」
「あるわよ」
真弓はプクンとした顔立ちで、あだ名を焼売(シェウマイ)と呼ばれているが、ムキになるとすこし三白眼になるところは母親の三輪子そっくりである。
「嘘だと思ったら笑ってごらんなさいよ。パパだけ外れるから」
釣り込まれて笑いかけ、気がついて、おかしくもないのに笑えるかと威張ったのがおか

しいと、残りの三人が笑い声を立てた。日頃無口であまり笑わない守も笑った。一番大きな声で楽しそうに笑ったのは三輪子である。塩村も笑い、音楽のことは判らないが、日曜の昼、家族四人水入らずで笑い声を立てるのはどんな合唱よりもいいなあと思った。

四十二の厄年というのに、このところ塩村はついていた。サラリーマンだから、急にどうこうはないが、この春の異動で直属の上司が専務になった。建売だが家のローンももう一息である。血圧も正常、胃の調子もいい。ゴルフのパットもきまっている。

「蝸牛枝に這い、神、そらに知ろしめす、すべて世はこともなし」

あれはブラウニングだったか、猫額大の庭のせいかここ何年も蝸牛を見ていない。

真弓がまた呟いた。

「あ、泥棒……」

台所に人がいる、という。

声をひそめて、

「いまドア閉めて出ていった」

「しつこいな、お前は」

そんなに気になるんなら立って見てこいよ、と塩村は言い、三輪子も、

「台所になんか持ってくもの無いわよ。入るだけ損するんじゃないの」
笑いながら席を立った。台所をのぞいて、あ、と言い、けげんそうな顔で振り向いた。
「どうした。なんか盗られたのか」
「盗られたんじゃないの。増えてるんですよ」
勝手口に近い土間に、プラスチックのバケツが置いてあり、なかに十五センチほどの鮒が一匹入っていた。

「どういうことなんだ、これは」
塩村は大きな声で言った。
「守、お前じゃないのか。友達と約束でもしてあったんじゃないのか」
守は、バケツのなかの魚をのぞき込みながら、ぼく、知らないと首を振った。三輪子も真弓も覚えがないという。
「おかしいじゃないか。みんな覚えがないものが、どうしてここに居るんだ。鮒がひとりで歩いてきたのか」
知らず知らずのうちに、大きな声でどなっていた。女房も長女も長男も、狐につままれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com